

六 生活安定への努力

昭和二十二年六月、先輩・友人の力添えで、岩手県の農林技手に採用されて、県庁の農地課に勤務することができた。

思い起こせば、昭和十二年に農事合作社に採用されて、両親を説得して十年間の許可をもらって渡満してから、約束どおり十年目に郷里で農政関係の仕事に従事することになった。しかし、この十年間の満州での経験は、私にとってまたと得られない貴重な経験であり悔いのない人生のひとつまでであった。

「ここは御国に何百里、離れて遠き満州の、赤い夕日に照らされて……」の満州の地において、志半ばに倒れ非業の死を遂げられた人々のご冥福を祈ってやまないものである。

私の半生流転の記

宮城県 高橋 武

北満州国三江省樺川県佳木斯^{ソウモース}、野戦郵便局気付、永豊鎮屯墾軍第一大隊第二中隊宮城小隊長というあて名に、私は限らないあこがれを抱いていた。農業には全然縁もない私は、北海道で牧場経営をする知人のもとに渡道するつもりでいたが、にわかには満州移住に変えた。いとこの安藤さんに度々連絡していたが、危険だからしばらく様子を見るので、待つように言われた。折しも家族招致の代表、森合宮城小隊長が隊員二人と帰省中で、県庁にて面接を受け、強く渡満の意思を述べた。森合小隊長も納得、了解をされて、いとこの花嫁と他の人々より二日遅れて敦賀に向かって郷里をたった。

敦賀では、各県代表の花嫁さん、宮城小隊の花嫁たち数百人が集合し、天草丸にて清津^{セイシン}及び函門^{トモン}を経由し

て哈爾濱^{ハルビン}に至り、哈爾濱^{ハルビン}江から松花江を船で下った。佳木斯上陸後、開拓団出張所で約一週間滞在し、永豊^{トイホ}鎮^{チン}へ昭和九年五月十九日に到着した。途中で追分峠に匪賊が出るという情報もあったが、弥栄^{トイサカ}峠も無事に越えた。

宮城小隊に入植、翌日から早速、農業に伐採に警備にと忙しく働いた。瞬く間に一年が過ぎた。作物の種類、秋の刈り入れなど楽しみもあり、また匪賊の襲来に対して討伐に参加したこともあった。宮城小隊の建設が完了して個人分身になり、昭和十一年に結婚し一女を授かった。その後、弥栄村共励組合の購買部に勤務したが、石田民夫理事長、高山理事、越井会計係柴さんなどに大変お世話になった。その間のつらいことや悲しいことや楽しいことが多く思い出されるが、事務の仕事でやり遂げてきた。

昭和十二年十二月、第二の魚深子事件が発生し、匪賊の襲撃により松山森林伐採警備隊長の石田理事が戦死した。他の小隊でも六人が戦死、わが宮城小隊でも三人の戦死者をだした。戦死者の遺体は、一時、組合

倉庫に安置し慰霊祭を行う悲しい出来事であった。

翌十三年に、縁故者による分村が行われたので、私も応募して、西弥栄開拓団として弥栄と千振二次との中間地に入植することになり、妻子は一時いとこのところで預かってもらうこととなった。十四年には、建設を完了し個人分身となったので、やっと妻子を呼び寄せることができて、いよいよ本格的に文字通りの開拓者となった。開拓者の使命、「五族協和」の実現に向かって一生懸命に働いた。

弥栄時代に覚えた農作業、見よう見まねの各種作業に全力を傾注して頑張り、馬の扱いはもちろんのこと、馬具用品の修理も自分で全部扱った。夏期の除草は大変だったが、秋には作物がよく収穫できた。冬期は、伐採に山に入ったり、松山森林伐採本隊の警備に協力したりしていた。花嫁さんたちもよくやっていたし、落ち着いた開拓団生活をしていたが、南京虫やダニにやられて困ったこともあった。

支那事変に端を発した戦争も熾烈を極めてきた。団の女性も男装したりもんぺ姿になって竹槍を持ち、敵

襲に対しての訓練に取り組んでいた。団員も次から次と召集されたが、我が地区からも、該当者十人中九人が現役として入隊した。

私は、たまたま用事があった宮城小隊のいとこの所に出掛けたが、いとこは組合に勤めており留守だった。帰って来るまで大友氏の家で待ち、夕方二人で話をしていたとき、馬櫓ばしりを飛ばして満人が「伊藤さん、兵隊ヘンドイで仕事だ」と赤紙を振りかざして飛んできた。いよいよよきかと覚悟を新たにしたが、そのときの召集令状の色が、今に至るまで目から離れない。召集令状には、一月二十三日、佳木斯第四三九二部隊に午前十時までに入隊すべしとあった。部落に戻る時間もなく、数人の本部の人たちに見送られて弥栄駅に行ったが、我が地区からも三人が駆けつけてくれた。簡単に挨拶し、後事を託し車内に入った。車内には、新婚ホヤホヤの見送り人もいて、何となく騒然としていた。

佳木斯駅に着いて、直ちに指定旅館に入り、それからが大変だった。応召後のいろいろな始末を綿々と手紙に書き、それに髪の毛、爪などを入れて遺品とした。

そして七生報国、天皇陛下万歳で結んだ。封をしてから、まんじりともせず越し方行く末を考えている間に夜が明けてしまい、朝食を済ませて指示された部隊に入った。身上調査などを実施して管内班に行ったが、各方面から集まった召集者で大変にざわついていて、重苦しい雰囲気だった。だれ言うことなく、沖繩要員だとの話がでてきたが、まだ半信半疑だった。翌日から訓練が開始されたが、なるほど毎日の訓練は海上における救助訓練が主であった。夜は毎晩、尾頭付きの食事でも出る有様であった。命令会報では二、三階級の進級が発令されるし、まるでお祭騒ぎだった。

一月二十八日の点呼時の命令会報で、だれだれ以下十七人は、第七九一部隊へ転属を命ずるとの発令があったが、私の名前もその中に入った。皆は、もっぱら沖繩行きと覚悟をしていたので喧々囂々けんけんごうごうだった。翌一月二十九日まだ薄暗いうちに、転属兵受領のため第七九一部隊の西田大尉が来られた。皆は第七九一部隊がどんな部隊か分からないので、西田大尉の襟章を確かめようと懸命だったが、襟章は緑であった。衛生隊だ！

と内心ほっとした。

引率され着いた部隊は、佳木斯第一陸軍病院教育隊だった。翌日から、今まで着ていた一装用の軍服から一変して普通の被服となった。鉛筆、ノート、衛生教程などを雑嚢に入れて、毎日講堂に通って教育を受けた。私たちの第七班は、班付上等兵以下十七人で、主に新潟県出身者が多かった。教育隊長平島軍医大尉のもとに助教が軍曹、助手が上等兵であった。班内の清掃はもちろんのこと、廊下などもピカピカに磨きあげ、特に他班との境は懸命に手入れをした。

入隊時、食器受領で当時の週番上等兵に「第七班伊藤（著者の旧姓）一等兵、食器受領に参りました」と申し出ると、「声が小さい」と言われて二、三度やり直しをさせられたことがあったが、この意地悪も軍隊生活の一つだった。あるとき、見習士官の講義を受けたが、講義内容を全員があまり覚えておらず、質問に答えられなかった。さっそく罰として素っ裸になり、営庭を一周するよう指示されたので、降り積もる大雪の中で駆け足をさせられて、兵舎に入ると、洗面所

大タンクの上で助手の古年兵が待ち受けており、上からバケツで水をかけられた。やっと舎内に入り乾布摩擦で身を暖める始末だった。また、厳寒時の軍靴の手入れも大変で、底鋌に付着して凍りついている雪泥を取るのに苦労をした。

衛生教程、歩兵操典、戦陣訓、軍人勅諭、五カ条の御誓文など、頭に叩き込まねばならず、寝ても覚めても暗唱することに明け暮れた。このように規律に厳しい軍隊生活においても、抜け道はいろいろと考えたものだ。毎日通っていた講堂のペチカの焚口の蓋を、不寝番が開けておき、そこに煙草の煙を吐き出し、知らん顔をするということなどもやったものだ。

朝、起床十分前に、起床準備という号令が小声でかかり、直ちに全員脈を測る。そして大声で叫ぶ起床の号令で、手早く寝具を片付けて、点呼ラップで駆け足で営庭に集合し点呼をとる。終わってからラジオ体操、壇上の指導者と反対になったりして苦笑する。

兵器の手入れは厳しく、すべて責任は連帯だ。初年兵から召集兵、二、三年兵、古年兵と種々様々だが、

上下がはっきりしていて、つらいこと、悲しいこと、面白いことなどいろいろだが、本質的にはよい方が得をする。

ある日、下士官室当番で上官に欠礼して、後ろ向きで奥のガラス窓を拭いていたら、入口で清掃していた古屋初年兵が大声で号令をかけた。すぐに振り向き敬礼をしたが、ちょっと遅れた。上官の平川准尉が舎内に入ってきた。後からきた井上班長が号令をしたからだ。さあ大変、その夜は週番上等兵から「本日の下士官室当番兵は全員自習室に集合せよ」の命令だ。自習室では、「本日は上官に欠礼をした。これは要するに衛生兵として任務に欠けている証拠である。なぜ、欠礼したか」と言われたので、「それは古屋が」と一言、私は地方なまりの言葉で答えた。するとすぐに「この野郎！ 歯を食いしばれ、地方からきて間抜けだ」と左右の往復ビンタが飛んだ。問答無用ということでも悔しいが、我慢するしかなかった。当時、沖繩に出征した同年兵が、輸送中に敵の機銃掃射を受けて全滅したとのうわさが流れていたので、これくらいのことでは

こたれてはと我慢をした。

軍隊生活にも慣れてきたころ、たまたま糧秣受領で弥栄、千振に公用出張があり、私が開拓団出身者であることが知れたのか、出張者が私の所にきて「伊藤！ 明日、家に寄ってきてやるが、何か用事はないか」と聞きにきた。そして、公務出張から帰隊して、ぼた餅やら飴などをもってきてくれた。また、弥栄組合にいとこが勤めているので寄ってきてくれた。その折に弥栄葡萄酒を土産によこした。その後、この葡萄酒を班内全員でコップ一杯ずつ飲み、残りは防寒脚絆に入れておいた。あるとき、一斉検査があり発見されてしまい、自分の間下士官室で預かるといわれた。時期をみて飲ましてやると付け加えていた。

四月二十二日は、部隊創立記念日の軍旗祭であった。当日班長室から葡萄酒を取りにこいとのことで下士官室に受領に行くと、班長があまりにうまかったので手をつけて飲み回していた。残りはそれだけだと言われ持ち帰ったが、致し方なかった。軍旗祭の御馳走は大盤振る舞いで、酒も大方出たが、私は酒が全然駄目な

ので、戦友に分けて振る舞った。余興に高島上等兵の「広沢虎造の浪花節」、五代儀上等兵の「九段の母の歌と踊り」と大変なものだった。

戦争も日増しに激しくなり、部隊でも待避壕、防空壕の構築などで大変だった。私は、勤務割で事務室勤務となり、入退院兵の私物検査を担当しており、営外作業はなかった。小林班長はよい班長であった。院内勤務になって、班長が週番をしているときなど、一区切りがついたときには「伊藤、週番室に來い」と言われた。職務を離れて兄弟と同じように温かい言葉をもたらした。「開拓団出身と分かっていたら、公用出張に行かせたものを」とまで言われた。小林班長は温和な人だった。

昭和二十年八月七日、珍しく私は、衛兵当番に勤務、当日は大雨で風が強かった。師団司令部では何を焼いているのか、紙屑などが吹き飛び散っていた。井沢兵長と横殴りの雨風の中を巡回に出て、駆け足で行進中、まだ引き揚げて来ない営外作業の兵隊の身を案じて、雨にぬれながら待っている部隊長に会った。当然、停

止敬礼をしようとした私たちを見た部隊長は手を振り、「敬礼はよい早く行け」と合図をされたが、それでも敬礼をして早駆けで衛兵所へ向かった。夕方には小降りになったが、軍衣袴はさず濡れであった。

仮眠中の夜中に、突然ドカーンというものすごい音と共に、衛兵所の天井からバラバラと砂礫されきが落ちてきた。驚いて飛び起きた。「空爆だ！」。直ちにまだ濡れている軍服を着たが、半乾きで堅くなっている軍衣袴を着るのに苦労した。守備任務に就くために、増加衛兵が三十六人、夜明けまでに動員された。

師団司令部へ伝令に行った高崎上等兵が帰ってきて、大声でソ連と戦争だと言ったので隊内は騒然となった。直ちに患者搬送と重傷患者の処置をする。実は数日前から不審に思っていたが、水道の断水など変な事態が起きていたので、すぐに防疫給水隊が活動して、今まで使用していない井戸から揚水濾過することとした。いよいよ戦時体制となり、ピカピカに磨いていた部屋も土足で入るようになり、机の上にはすだれが敷かれ、握り飯が山のように置かれた。

飛行場、軍事施設、野戦貨物廠などを爆撃して、ものすごい爆音を立てて飛び去るソ連機。毎日のように爆撃があつて黒煙もうもうたる市街地。正に戦場そのものとなつた。我が病院には、ときどき流れ弾が落ちる程度で危険が少なく、被害は無かつた。

第十五軍管区司令官百武吾一閣下の命令で八月十三日佳木斯撤退となる。軍用トラックで佳木斯埠頭へ向かう。沿道では、幼児を抱き上げるエプロン姿のお母さんや老人が、日の丸の小旗を振つて、「兵隊さん万歳、万歳」と叫んで見送つてくれた。地方人を捨てての退去だ。戦争の悲惨さをしみじみと味わつた。牡丹江、哈爾濱を経て新京に向かつたが、今考えると無意味な戦争であつたと思う。弾薬を一発でも多くと私物や南京袋入りの大豆などの食糧を松花江に捨てたが、もつたいないことをしたものだ。

途中で、対空監視の任務に就き、甲板上で腹を冷やしてしまつた。松花江を上つた伊漢通^{イカントウ}で、上下する船があり変だなど思つていたら、師団司令部から、タイラルミン洞窟での兵舎建設作業に派遣されていた石橋

同年兵が乗り込んできた。無事に再会したことを喜び合つたが、石橋は「伊藤！ 日本は負けたよ」と言つたので私は、「石橋！ そんな情報を流したら大變だからやめろ」と言つた。

翌十五日上陸、方正に向かつた。目前に進駐してきたソ連兵には手出しをしてはならんとの命令が出て、それに従うほかなかつた。ソ連兵の顔を見るが、悔しさと憎悪で一杯だつたが、どうしようもない。彼らは我々のところにやつてきて、甘味品の入っている箱の太縄を切つて略奪を始めたが、ただ腕をこまねいて見ているほかなかつた。

方正へは徒歩で約八キロ、ソ連の旗や中国の旗を振る満人から悪口を言われるが、これも負けた悲哀であつた。やがて方正に到着、幕舎に入り、十時ごろ全員宮庭に集合の指示があつた。前列の将校の緊張した面持ち、それを見ていると石橋の言葉が浮かんできた。部隊長から停戦協定が結ばれたと告げられた。その途端に前列の将校の顔が真っ青になつた。部隊長の憂い深い顔が印象的だつた。

無条件降伏などと様々なうわさが飛び、だれの話も信用できないが、皆は平然とした顔をしている。

地方人や、開拓団は方正国民学校に集合し、そこで分宿するという話が伝わってきたが、私も家族もこの有様かと思うと心配になってきて、早期に召集解除になるよう申し出ようと決心した。うわさによると第二次千振や弥栄は昨日出発したとのこと。今なら間に合うと思ひ、ソ連の捕虜になる前にと、部隊長に願ひ出たが許可にならなかつた。むしろ部隊と共に行動していた方が安全だと言われたが、やむを得ないと思ひ、ただ無事を祈るほかなかつた。

直ちに、武装解除、武器、弾薬、軍刀などが没収されたが、将校だけは軍刀を取られずに丸腰にならず面目を保った。

撤退時、女子挺身隊の通訳が満人との話がうまく通じないので、私が代わって通訳をする事になった。上手でもないが、何とか土民語が役立った。丸腰となると弱いものだ。強くなつたのは満人で、鎌や鋤を持って物取りに押し寄せてくる、地方人で日本刀を持って

いた人が、それを振り上げるとワーッと行って逃げる、また途中から引き返してきて押し寄せてくる、全くイタチとタヌキの追いかけてこた。婦女子の持ち物がある以上は、このままでは駄目だから、不要な品物を提供することとして満人と話し合い、品物をやるからこちらの縄張り内には入らぬようにした。そして品物と交換に、食糧を渡すことを約束させた。かごや麻袋にとうきびや野菜、その他の食糧を入れて持ってきたので、当方は女子の着物類を一枚、二枚と渡すと、満人は喜び奪い合つて持ち去つていった。

私の仕事は、馬車徴発係で伊漢通からの糧秣、医療器具の搬送・監視に当たっていたので、一人だけ武装をしていたが、十八日には完全に武装解除をした。そのうちに、大勢で使用する飲料水が不足してきた。雨は降らず満人部落の井戸も空。しばらくすると恵みの雨が降つたが、上流では洗濯をし、下流では食事の支度をする。大変だが段々と汚物・汚水も苦にならなくなつた。

引揚者の悲惨な姿を見ても、ソ連の人々は手も下さ

ず、満州から略奪した食糧を満足に食べさせないのかと腹立たしくなる。そのうちに、われわれは千人単位の大隊に編成されて捕虜となり、手も足も出なくなつた。戦争中の捕虜ならばやむを得ないが、戦争もせぬままに終戦になつたのだから、直ちに解放すべきと思うが、ソ連の政策には腹立たしいが、今さらどうしようもなく、悔しいことだ。

山崎大隊長以下将校下士官兵は、船で松花江を下ることになつたが、女性には別行動で、佐藤少尉が引率して陸路を引き揚げることになり、手を振って別れた。船中で、部隊長から初めて「お前たち、ここぞと思う所で別行動（脱走）をとつてもよいぞ」と言われたが、それはもう遅過ぎた。今さらどうにもならないし、しかも船中ではどうにもならず、あきらめるしかかなかつた。

九月十三日、ソ連領のピラに上陸した。航行中配給の乾パン、生にしんなどだれも手を付けなかったが、やがて生にしんは乾燥してしまつた。ちよつとかじつたらうまいので皆が食べ始めたが、口が脂だらけであつ

た。そこから貨物列車に乗せられ、どこに行くのか右に行つたり、左に行つたり戻つたりで、皆目からなしい。停車するとそこで食事の準備、やつと湯気が出始めると乗車の命令、生煮えの粟飯を口にする。そうこうしているうちに、停車・下車をする。そこから徒歩で行進するが、途中でソ連人の子供らから石を投げられたり、「ヤポンスキー（日本人）、日本サムライ腹切れ」などの悪口雑言を浴びせられる。収容所に着いたが、そこはドイツ兵の捕虜収容所か、囚人収容所だったところのようで、地面を掘り、屋根を架けただけの兵舎であつた。周囲に小川が流れており、木立が林立して監視哨もあり、石ころだらけの中を馬を乗り回して監視するソ連兵がおり、守るに堅く逃げるに至難なところだった。そのうちに、二、三人が脱走したが、翌朝には捕まり大変なことになつた。

一カ月ぐらいして、ピロビジャンへ移動し、本格的な重労働が酷寒のシベリアで始まつた。伐採が主な仕事で、筏を組んで搬出などもしたが、文字通りノルマ戦争である。

搾取のない国に搾取ありで、食糧に限らず少ない配給が思うように手に入らない。被服の破れを繕うにも糸がないので、ガーゼから一本ずつ糸を抜き取り、よりをかけて縫う。靴下の破れや上衣の肘、ズボンの膝が特にひどかった。履物も、牛毛を圧搾したカートンキーなる長靴で、底が破れると針金で縫う。舎内にいるときは柔らかいが外に一步出るや、底が硬く凍りつき、三角になって下手をすると転んでしまう。運が悪いと倒れて頭を打ち、そのまま死んでしまう例もあった。

煙草の巻紙にする新聞紙も貴重だった。紙幣を使つたこともあったがうまくない。用使にも困つた。そんな生活が続いた。

伐採作業は、弥栄時代からのお手のものであった。検収には、大隊長とソ連の民間人がきたが、私が見達であった。運搬する太い丸太は頭を使わないとノルマが果たせない。ポーチカ樽の帯金を五、六本使用し、それを組み合わせて帯にし、丸太に斧で切り口をつけてそこに帯金をさして二人で向き合い掛け声を合わせて

引き出すと楽に動く。監視兵も驚いて「ハラシヨ（すばらしい）！」と叫んでいた。八時間で百パーセントのノルマ達成だった。

ノルマに責められて空腹を抱えながら懸命に働いた。しかし私も、ついに倒れた。ものすごい寒気に襲われ、ストーブがあっても震えが止まらない。皆から毛布をかけてもらい二、三人で押さえてくれたので、ようやく震えが止まった。翌朝、医務室に行ったが、熱は三十七度少々、ソ連の軍医は三十八度ないからといって休養許可をくれない。平島軍医が談判して、ヒロビジャンの病院に入院となった。病名は急性肺炎だった。直ちにトラックに便乗、病院まで楽に行けるようにと注射をしてくれた。到着後、熱でガタガタ震えているにもかかわらず、体を洗われ、わき毛なども全部剃り落とされて病衣を着た。もと学校だったところを改造した病院だった。年配の看護婦に助けられた。退院まで重患食を与えられた。毎週退院診断があったが、軍医からの許可がなかった。注射の技術も上手でなく左右の血管にカルシウム注射をしたがなかなか入らなかつ

た。二月になって退院したが、元のラーゲルには戻れなかった。

今度のラーゲルは街工場で、全然勝手の違う仕事で、ノルマはなかった。そこでコンピを組んだのが、東北なまりの懐かしい秋田出身の武藤実三郎君だった。お互いに名乗り合い、それから何かにつけても、心を打ち明けて話をした。書き物を持ってないのでお互いの住所氏名を頭の中に叩き込んだ。三カ月ぐらいでラーゲルが変わることになり、お互い忘れないよう励まし合って別れた。後日のことになるが、昭和二十四年十二月十日に仙台に帰ったが、彼は既に引き揚げており、義兄の所に二通もの手紙をくれたとのこと。その後、北海道の開拓地に入植したが、ある日、材木の下敷きとなり亡くなった。冥福を祈るのみだ。

ブルーチエの収容所に転じて草刈作業、発電所の石炭運搬などをやった。相変わらず食糧不足でハンストを起こしたこともあった。土木作業中に、また肺炎を起こした。二度にわたって血痰を吐いたが休養の許可は出なかった。震えが止まらない。鈴木軍医が肺炎だ

と診断したが薬はない。どうしようもなくピタカンを打ったが、吐く息はよいが、吸う息が苦しい。軍医から「伊藤！生きて帰りたいか、死んで帰るか」「もちろん生きてだ」「それならよく聞け、吸う息は駄目、吐く息を一つ一つ口の中で数えろ」と、その暗示に従った。意外にも翌日、目が覚めたら鈴木大尉が腕を組み私を見つめていた。大丈夫だと初めて喜びの色をみせた。奇跡が起きて助かったのだ。暗示がよかったのか。

年毎に環境もよくなり、炊事当番も配給物資を上手に利用し、お楽しみ料理を週一度ぐらい食べさせてくれた。その後もいろいろなことがあったが、ハバロフスクに転じて第七分所に入った。ちょうど前が将官ラーゲルで、山田乙三大将ら将官連中が収容されていた。私たちが、作業整列し収容所を出るとき鉄格子につきまわり眺めていた。

ハバロフスクでも、あっちこっちの分所を回されて、やっと待望のダモイ（婦国）名簿に名前が載った。スターリンに感謝文を贈呈、これで共産教育ともお別れだ。十一月二十七日ナホトカへ。久し振りに見る灰色

の日本海だ。前にタモイしたはずの河野一等兵が、理髪経験があるために足踏みしていた。二十九日に帰国船恵山丸が接岸、ソ連係官から名前を呼ばれ名簿と照合、所持品の検査などがあったが、いつ出発停止になるかも知れず、びくびくしていた。やがて乗船シタラップから上がる。だがまだ安心はならない。出港合図が鳴り響く。一日千秋の思いで待った引揚げ、しかし異国の地に散った同胞の悔しい思い出に、ただ涙、涙。

十二月一日舞鶴の緑を見て日本に帰ってきた感激でいっぱいだ。翌二日上陸。DDTの見舞いを受け、各県窓口で事務手続きをして、帰郷旅費千円を受け取り、すし詰め列車で仙台へ向かう。福島駅に兄弟が迎えにきてくれたが、栄養失調で顔が変わっていたのにびっくりしたとのこと。満州に残った家族が全滅したことを聞かされた。覚悟はしていたが涙も出ない。さぞつらかっただろうと思う。生き長らえた私は、「戦争はもういやだ。悲惨なものだ、二度と再び起こさぬようにしなければ」と考えた。足掛け五年の捕虜生活

もこれで終わりだ。

引揚げ後は、町内の世話役をしばらくやり、その間に再婚し一女を授かった。納税貯蓄組合設立時、初代の会計係をやった。弥栄時代の経験が役に立ち、帳簿の作成など何とかやり遂げたが、シベリア帰り、赤だと言われ種々苦労した。その後、転々と職が変わったし、シベリアでの悪食が原因で胃潰瘍が悪化し大手術をしたりした。

三十八年八月から衣料市場の事務を手伝い、簿記の面白さに懸命に勉強して頑張って二十年も勤めた。この間、妻子の支えもあり、何とかやり通したことに感謝している。

五十二回目の終戦記念日を迎えて、同胞の御霊の冥福を祈りつつ、この文を書いた。